

本学所蔵の往来物の研究 (I)*

梅村 佳代**
(教育学教室)

要旨：本学所蔵の往来物48点を整理し、そのうち本学では最も多い種類である実業類18点を取り上げた。実業類の往来物とは「商売往来」をはじめとする商業・農業・工業などの職能に関する語彙や職人がつかう道具・用具の名称を集めて、教科書として編纂されたものである。本稿では実業類を取り上げたが、次号において、他の30点の往来物について引き続き検討する予定である。それに先立って、往来物の研究史にもふれ、岡村金太郎、石川父子らの往来物研究への地道な研究努力にもふれた。

キーワード：往来物、実業類、商売往来

はじめに

本学には附属図書館と教育資料館にあわせて48点の往来物が所蔵され、一部は教育資料館の展示物として使用されているものの、そのほとんどは附属図書館に所蔵されている。この往来物がどのように収集されて現在ここに所蔵されるに至ったかは、明らかではないが、多くの往来物に、戦前の本学の前身のひとつである奈良女子師範学校の校印と郷土室印が押されていることから、1930年代ころ郷土教育のために収集されたことが推定できる。本校では48点全部をとりあげることは紙面の関係からできず、次号において残る30点を取り上げる予定である。本稿の分18点は実業類とされるものであり、最も多い種類である。残り30点は教訓・消息・地理・歴史・理学類などの多様な類や女子用往来物として数冊ずつ分類される内容が所蔵されている。

第一章 往来物の研究史

往来物に関する研究史を概観する。1906年(明治39)5月、塙保己一の輯した正統二編に続いて、国書刊行会により江戸時代の書籍が集められ『続々群書類従』が発刊された。その教育部門が『続々群書類従 第十 教育部』¹⁾である。当書には往来物7点が採録されている。7点の往来物は「京都往来」「自遣往来」「源平往来」「商賣往来」「名産諸色往来」「諸職往来」「消息往来」でありいずれも代表的なものである。作成年代や作者、簡単な内容概要が「例言」でふれられている。たとえば「京都往来」(一卷)については延宝2年、鈴鹿定親の作とされ、「年中行事より、京都市内の町名、及び付近の名所旧跡」が記されているとされる。また「自遣往来」は「江戸往

*A Study of Ouraimono preserved in Nara University of Education

**Kayo UEMURA (Department of Pedagogy, Nara University of Education)

来」ともいわれ、作者は不詳、「幕府正月の規式、諸国土産の進物類、及び江戸方角等」が記され、作成時期は「慶長以後元禄以前の作ならん」と推定されている。本稿でとりあげる「商賣往来」は作者不詳、「宝永以後享保以前の作」と推定され「商賣普通通用の文字一切の商品を列挙したる」内容であるとされる。また「諸職往来」（一卷）は作者は不詳、江戸中期の作とされ、「士農工商に涉り一般の教訓を列記したもの」であるとされ、高井蘭山著の「消息往来」（一卷）は「書簡文に於ける普通文字を列記して初学の者に論した」内容で、天保前後の作成とみる。そして、商売往来と消息往来が流布板本及び注解本とも多数あり、江戸時代の子どもの初歩的な手習い手本であったとする。

1910年（明治43）から11年にかけて同文館編纂局編『日本教育文庫』⁹⁾が発刊されている。全部で11巻あり、「教科書篇」に往来物が収録されている。とりあげられている教科書類は「実語教・新実語教・童子教・孝子教・本朝三字教・大和小学・武教小学・古状揃・女実語教・女訓孝経・女小学・女中庸・女大学・女論語・女古状揃園生竹・女子手習状・難波津浅香山歌・いろは歌・名頭字・国盡・雲州消息・十二月往来・新十二月往来・貴嶺問答・庭訓往来・異制庭訓往来・遊学往来・喫茶往来・釋氏往来・山密往来・雑筆往来・新札往来・尺素往来・新撰類聚往来・富士野往来・坂田金平往来・諸職往来・増字番匠往来・名産諸色往来・諸国名物往来・謹身往来・家宝往来・百姓往来・商賣往来・消息往来・續消息往来・女消息往来・女庭訓往来・京都往来・東海道往来・吾妻路往来・自遣往来・江戸方角・隅田川往来・駿府往来・仙府年中往来・真間中山詣文章・塩竈詣文章・湯殿山詣文章・靖献遺言・弘道館記述義・大統歌」の62種にわたり掲載され、解題において簡単な注釈がなされている。これらの所収往来物は同文館編纂局代表、黒川真道によれば内閣文庫本を主として、あわせて井上哲次郎、芳賀矢一、三宅米吉、辻善之助、白石正邦、三上参次、大槻如電らの資料提供や助言による収集であるという。いずれにせよ、往来物資料集としても貴重といえる。また『続々群書類従』に収録された数より多くの往来物が収録され、『日本教育史資料』が散逸する日本教育の史資料を収集保存することに目的のひとつがあったように、この往来物の復刻も意義ある事といえる。

次いで1922年（大正11）岡村金太郎編『往来物分類目録』⁹⁾が発刊された。これは往来物のみをとり上げて分類を試みているもので、岡村金太郎により「熟語類・消息類・訓育類・歴史類・地理類・実業類・合書類・理学類・雑書類」の9種類に分類された。岡村は「往来」とは「元ト往復書簡ノ意ニシテ、古ハ書簡ヲ綴ル為メ字ヲ読ミ字ヲ習ヒタルヨリ、初学ノ児童ノ為書簡ノ体裁ニテ諸種ノ事項ヲ教フル教科材料ヲ往来ト称シタルコトハ、足利時代ニ庭訓往来ノ成レルヲ以テ証スルニ足ル」とのべていることから、往来物が往復書簡そのものであったものが、その書簡のために手習いをするようになり、書簡体裁の学習教材を往来物と称することになったこと、江戸時代には往来物の名称がなくても寺子の学習の教科書と同義語だったことを伝えている。また「類聚の範囲」を往来物が寺子屋教科書と同じ意味で使用されるようになったことから何々往来の名前がついていないもの、例えば孝経とか三字経も広い意味の往来物としてとらえ、江戸時代の発刊物のみならず1890年（明治23）頃までに発刊されたものも含めて分類したのである。目録とともに岡村金太郎は『往来物に依って見たる徳川時代の庶民教育』⁹⁾を発表し、分類の順序が教科の

発達の順序によることを明らかにした。さらに同年6月、海藻学者である岡村が新潟県佐渡郡を訪れた時、同郡真野町新町にある往来物の蒐集者であった山本を訪れ、岡村より教示を受けている。その後、山本はいよいよ蒐集に熱を入れることとなり、佐渡各地の独特の往来物とされる「四日町往来」（真野町）、「長谷往来」、「小倉往来」（畑野村）、「多田往来」（松ヶ崎村）など多数発見された。1953年（昭和28年）2月には山本修之助編集・発行『荏川文庫所蔵往来物分類目録』⁹が出されている。この荏川文庫所蔵往来物の分類目録は1922年（大正11）の岡村金太郎編『往来物分類目録』に順拠して10種類に分類されている。「はしがき」によれば1915年（大正4）6月、通信省主催の東京通信博物館において「往来物展覧会」が開催された際に、山本修之助の父は所蔵する往来物45種類を出品したところ、「目録」によれば全国の多数の種類往来物が出品されているのを知り、通信史料であり庶民教育史料である往来物の重要性を痛感して1937年（昭和12）6月、73歳で亡くなるまでの20余年間にわたり蒐集したものであるとされている。1952年（昭和27）、石川謙が学術講演会のため佐渡郡を訪れ、山本が収集した往来物の価値と意義を強調したことが荏川文庫の設立と目録作成の契機となったことも伝えている。

そのころ法政大学教授、石川謙は往来物の研究に着手しており、1927年（昭和2）5月に『往来物落穂集』⁹を発刊し、山本が蒐集した「多田往来」「四日町往来」をそれに収録した。ここで往来物の蒐集家山本父子と岡村と石川が繋がられた。その後、石川謙により庶民教育教科書としての往来物研究がさらに続けられ、1938年（昭和13）に発刊された『日本近世教育史』⁹所収論文に「往来物研究の教育史的理念と方法」「地理科往来物についての研究」「消息科往来物についての研究」「実業科往来物についての研究」「歴史科往来物についての研究」など発表されている。しかし石川謙の子息石川松太郎によれば、この往来物分析は石川謙の承諾を経ずに発刊されたものであるらしく、内容の吟味が必要であろう。

戦後になり、戦前から往来物研究にとりくみ、その後の往来物研究史では先駆的・基礎的な研究を築いた石川謙による本格的な成果が出された。1949年（昭和24年）8月、『古往来についての研究—上世・中世についての初等教科書の発達—』⁹及び1950年（昭和25）年『庭訓往来についての研究—教科書の取扱方から見た学習方法の発達—』⁹の二大著の発刊となった。続いて、戦後の教科書研究の上で基本史料となった『日本教科書大系 往来編』が発刊され、石川自らが収集した往来物の一部が収録されている。そこでは石川による往来物の分類がなされた。「教訓」「社会」「語彙」「消息」「地理」「歴史」「産業」「理数」であり、これとは分類を異にした女子用・合本科の二分野があげられた。岡村の分類と比べると、岡村の「熟語類」は石川「語彙科」と対応し、「消息」「歴史」「地理」は同じ分類とされ、「訓育類」は「教訓」と対応し、「実業類」は「産業類」に対応する。また「合書類」は「合本科」に対応し、「理学類」は「理数」に対応しているが、分類を独立させた「女子用」が新たな視点である。特に石川謙の前述の古往来の研究成果は大きく、近世以前の教科書という未知の分野を開拓した。さらにあらたに類として「女子用」を独立させたことが石川の分類の特徴といえる。さらに石川謙の子息、石川松太郎により往来物の研究が引き継がれ、1986年10月1日、石川父子による収集本の文庫である謙堂文庫の目録が発刊された。謙堂文庫・石川松太郎編『往来物分類目録並に解題 第一集 —古往来[一]』及び

1992年12月10日、謙堂文庫・石川松太郎編『往来物分類目録並解題 第二集 -古往来[二]』である¹⁰⁾。その後、石川松太郎により1988年7月『往来物の成立と展開』¹¹⁾が発刊され、形態や分類による考察が全般的に深められ、細部の解明へと進められている。

この経過から大正初期の通信省博覧会当時には、全国に江戸時代以来の往来物の現物が多種類にわたり多数現存していたことが推定でき、通信省博覧会出品目録の所在も探索する必要がある。そうすれば大正初期の往来物現存実態が把握できよう。海藻分類学者、岡村と庶民の書簡史料としての往来物収集者山本父子と、庶民教育教科書である往来物研究者石川父子とが「往来物」を通してつながっていく経過をたどって往来物への関心の所在や往来物研究としてとり上げられる契機や分析の進展の経過もさらに深められる必要があろう。

その後もさらに、石川による往来物研究と目録作成への努力が続けられる。石川松太郎による岡村金太郎蒐集の往来物がマイクロ化され、全国に普及した。その「『往来物分類集成-マイクロフィルム版-』収録書目録」¹²⁾も作成された。これらは、東京大学総合図書館所蔵の岡村金太郎蒐集本とそれ以外の東京大学総合図書館所蔵の往来物を合わせてマイクロ化されたものである。分類は岡村の分類によりなされている。その作成時のことは石川松太郎「岡村金太郎と往来物」(付録一)及び「往来物に就きて-大正十一年岡村金太郎講演-」(付録二)にくわしく述べられている。このころ、石川により岡村金太郎の業績が高く評価されている¹³⁾。

1992年(平成4)11月から1994年(平成6)3月にかけて石川家の謙堂文庫所蔵本を影写して、石川松太郎監修『往来物大系』(影写本・100巻)が発刊された¹⁴⁾。そこでの石川松太郎による分類は「古往来」「語彙科」「消息科」「教訓科」「歴史科」「地理科」「産業科」「社会科」「女子用」「百人一首」「理数科」「合本科」であり「古往来」「社会科」「百人一首」の分野を独立させて扱っている点が新たな試みである。

他方、1993年(平成5)5月より1994年(平成6)6月に江森一郎監修『江戸時代 女性生活絵図大事典』第1～9巻と別巻1の合わせて10巻が発刊された。石川により独立した類としてとりあつかわれた「女子用」ものが更に、進展され影写され研究論文も別巻として付加されている。

さらに教育史以外の分野でも往来物を取り上げられている。1973年11月30日、東京家政学院大学編集・東京家政学院短期大学発行『大江文庫目録 江戸時代篇』が発刊されている。また1981年(昭和56)3月10日に宮内庁書陵部・東京大学国語研究室蔵・佐藤武義解説『雲州往来二種』も発刊された¹⁵⁾。また教育史分野で石川父子以外に三好信浩による実業教育史の研究三部作シリーズが発刊され、『商売往来の世界-日本型「商人」の原像をさぐる-』も出されて、関心の広がりをみる¹⁵⁾。

1992年3月には、三保サト子編『三次市立図書館蔵往来物総目録』¹⁶⁾が発刊された。広島県三次市の三次市立図書館には元旧制京都高等工芸学校教授、平井右平(1883-1950)の寄贈により往来本612点が所蔵されて「平井文庫」として保存されている。その所蔵本が三保により目録化され発刊されたものである。

このように1907年(明治40)の『続々群書類従』発刊以後、現在に至るまで、往来物への持続的な関心と研究が払われ、現在ふたたび関心がたかまりつつある。

第二章 本学所蔵往来物の内容的検討—実業類

本学所蔵の往来物の検討をするのであるが、岡村金太郎の往来物分類を基底としながらも、往来物研究を長年にわたり地道に継続し、独自の往来物分類をも示した石川謙と、その仕事の共同者であり、継承者でもある子息石川松太郎による分類をもとに考察し、必要な時には岡村の分類にふれて考察する。石川松太郎の著書『往来物の成立と展開』では一「熟語類」、二「消息類」、三「訓育類」、四「歴史類」、五「地理類」、六「実業類」、七「その他」には理学類・女子用往来があげられ、全部で7種類に分類されている。そしてこれらの7種類を「近世の往来物」としてまとめられ、古往来物としては近世以前の往来物をまとめて「古代・中世撰作の往来（古往来）」とされ、さらに一「消息文例集」、二「語句類」、三「十二月往来型と拾要抄型との複合体」、四「教材内容の伝達を主とする諸文体の往来」の4小項目に分類されている¹⁷⁾。いずれもこの順序が時期的経過を意味している。まず本学所蔵の往来物のうち最も点数の多い「商賣往来」と、その他の実業や職業に関わった内容の往来物を取りあげる。岡村・石川ともに「実業類」に分類しているもので年代的には、幕末期ころに広範に流布したものと推定されるものである。

実業類では番号1「商賣往来」、番号2「商賣往来絵字引」、番号3「萬家重訓 商賣往来講釈 全」、番号4「世界商賣往来 全」、番号5「續世界商賣往来 全」、番号6「續々世界商賣往来」、番号7「萬国商賣往来 全」、番号8「萬国新商賣往来」、番号9「開化普通商賣往来 全」、番号10「現金商賣往来 完」、番号11「萬家日用商家往来 全」、番号12「頭書平仮名絵入問屋往来」の12点の商業関係の往来物と、農業に関する番号13「百姓往来絵抄 全」、番号14「地方往来」、番号15「改正農業往来 全」の3点、建築業の職人工人に関する番号16「柱立往来」、番号17「百工往来」2点、諸職業に関する往来物である番号18「諸職往来」1点と、あわせて18点を取りあげる。（別表(1)）

(1) 商業型の往来物

商業関係類は番号1～12の「商賣往来」関係10点と「商家往来」1点、「問屋往来」1点である。

〈A〉江戸時代の「商賣往来」

年代の古いものからみると「現金商賣往来」が文化5年（1808年）、「商賣往来講釈」が嘉永年間のものであり、「商賣往来絵字引」、「商賣往来」（番号1）の年代は不詳である。高橋幹夫『江戸商賣絵字引—絵でみる江戸の商い』によれば「商賣往来絵字引」は初編と二編がつくられており、「初編ができたのは文政末から嘉永頃（1829～53）ではないかと推測する。とにかく幕末という時代だったことは確実だろう¹⁸⁾」としており、二編は「元治元（1864）年という年は後四年余りで幕府が消滅する年でもある。その年に刊行された二編がある¹⁹⁾」と述べて、初編は文政から嘉永ころ、二編は元治元年（1864）でいずれも幕末としている。本学往来物「商賣往来絵字引」は高橋によれば「二編の冒頭は聖徳太子が登場する」とあるから内容からみて初編にあたと推定される。高橋説によれば本学のを初編とすると幕末期とくに文政から嘉永ころあたりの可能性がたかい。

内容構成は基本的に4点とも『続々群書類従』所収「商賣往来」と同類型の内容から構成されている。『続々群書類従』によれば「商賣往来一巻」について「本書作者詳ならず。商賣普通通

用の文字及一切の商品を列記したるものなり。時代も亦知るべからずといへども、宝永以後享保以前の作ならんと思せらる。流布板本及註解本許多あり²⁰⁾とされ「商賣往来」の最初の作者は不詳であり、時期として宝永以後享保以前と推定されていた。しかしその後、石川謙・石川松太郎によれば「商賣往来」の原型は元禄七年(1694年)にできた「商売往来」であり、作者は堀流水軒であることが判断されている。また当時の「商賣往来」の広告文にそれに相応することも記されている。堀流水軒という人物についても「上方の手習師匠であったということ以上にはわかっていない」など詳しくはわかっていない。石川によればこの元禄7年「商売往来」型がその後驚くべき流布をとげ、そのほかの実業類の往来物の編纂に多大な影響を与えたとされている²¹⁾。

「商賣往来」の内容は「凡商賣持扱文字」ではじまる。取遣り日記・証文などの商売取引に必要な文字・数字・証文・日記の類、大判・小判から灰吹に至るまでの金子の名称(貨幣の名前)、貫目分厘毛と天秤・分銅の類、梗糯米や粟稗などの雑穀類、廻船に必要な知識として積登・問屋の蔵入置などの用語、運賃や水上など値段相場の決め方、金欄繻子緞子など16種の絹布の類、肩衣や羽織などの仕立物類、紺や花色などの染色12種、染入紋として縫散・雪折笹など19種類をあげ女童の好む模様・格好を心得べしとする。また武士の用具として弓・矢・鉄砲など21種をあげ、脇差の拵えの目貫・鮫縁などの細工は好みに従うこと、象眼・彫物の細工も土地の風俗に應ずるものとする。次いで唐物や和物の家財では珊瑚・瑠璃から硯箱・文庫・印籠など26種類をあげ、雑具には葛籠・筆筒・傘・木履にいたる46種類がとりあげられ、これらは時と所を見合わせて売買すべしとしている。また薬種香合の事として檳榔子・大黃など41種あげられ、これらは練・粉・散・膏薬などの形で贖を用いず正直を第一とすると述べられている。さらに山海の魚鳥の名前が鶴・雁や鯛・鯉・鱒など46種類があげられ、諸国の名物は際限ないのでこれを省略するとしている。最後に商売の家輩は幼稚の時より手跡や算術を行うと肝要とし、歌・連歌・茶湯など13種の芸能の稽古事は家業の余力あるとき折々に嗜むをこころがけるをよしとし、碁・小唄・三味線など酒宴の際の遊芸や泉水・築山など衣服や家宅は分限に應ずるをよしとした。すべてにおいて、金銭を費やすのは無益であり、見世棚を奇麗にして挨拶や応答も柔和にして高利を貪らず、天道の働きを恐れるものは「富貴繁盛子孫栄華と倍々利潤疑い無し」と述べられている。

この「商賣往来」は大変普及し、重版・改版されたものが多くでているが、編集形式や出版元の工夫などにより、石川によればさらに手本系・読本系・注釈本系・絵抄本系・特殊系の5系統に類型化されるという²¹⁾。その分類からすれば本学の「商賣往来」は読本系、「萬家童訓 商賣往来講釈 全」は注釈本系、「商賣往来絵字引」は絵抄本系、「現金商売往来 完」は編集方法からみると手本系になると推定できる。

「現金商賣往来」(文化5年)を群書類従本「商賣往来」と比較検討してみると内容構成ともにほとんど変わらないが、「先両替之金子」の「先」、「金者位品多」の「者」(以上二丁)の挿入、「梨子地、硯箱」が「梨子地之硯箱」(八丁)と「之」の挿入、「戸障子」が「障子」となり「戸」の削除、「立浪、籬之菊」は「籬菊、立波」(五丁)、「澤瀉、水車」が「水車、澤瀉」(六丁)「桃仁、蓮肉」は「蓮肉、桃仁」(十丁)、「龍腦、麝香」は「麝香、龍腦」(十丁)など、順序が入れ

替わっている事例、「雉子、雁、鴨、雲雀、白鳥、鶉」が「雉子、鶉、雲雀、白鳥、」〈十一丁〉などのように「雁」が削除され「鶉」の順位が上がるなどの変化もある。「鮑、鱒、鯖」は「鱒、鯖、鮑」〈十一丁〉へと順序が変化している事例、「干鱈、塩鱈、煎海鼠、鯨百尋、鰻、松魚節、鱈」は「干鱈、煎海鼠、鯨百尋、鰻、塩鱈、鱈節」〈十二丁〉と順序の変換と漢字表現が変化している。また「三弦」が「三味線」〈十三丁〉と変化しているのも同じ事例である。「現金商賣往来」だけをみても群書類従本「商賣往来」内容構成に変化はないものの、順序の変換や加筆、削除などの微細な手が加えられた跡がある。これは年代変化のなかで、よく知られた言い方や書き方、日常よく使われる物をはっきりさせるなどの考慮がなされたり、生活の上での使われ方の変化などによって為された加筆修正とみられよう。往来物の編集のされ方の特徴として、大人も子どもをも想定した読者の興味と便宜を考慮することに機敏である。そのひとつに本文への仮名つきの編纂のされ方、絵入り、彩色、頭書の工夫、本文の字体は習字手本となる行書体など往来物一冊で多目的な便宜が考えられている。「現金商賣往来」は巻丁には「円、方、直、曲」について歌まじりに人の付き合い方を教訓として述べ、二丁以下には頭書に本文の説明のための絵、三丁から十二丁まで「物の始」として本文の語彙の解説、十三丁から「書始」、十四丁から「七夕の歌」「十干十二支繪抄」が載せられ、本文の意味の解釈を深める助けと、絵入りによる興味付と視覚による理解を助け、基本となる語彙類学習も可能としている。師匠にとっても便利な書といえる。「萬家童訓商賣往来講釈」は本文のみであるが、本文文字の右側に平仮名がふられ、左側に漢字と片仮名による講釈つまり解説が簡潔に為されている。冊子後半に「商賣往来講釈」が七丁にわたり添付され、「商賣」「員数」「證文」などの語彙の「講釈」つまり説明が為されている。「商賣往来繪字引」では著者又玄斎南可識により「士農工商日用の言葉の文字に形を画き。令児愛娘早解。一寸画工の手を假て。商賣往来繪字引成る」と始めにのべられているように、本文の日用の語彙の説明と絵入りで彩色付きである。たとえば「墨」のところをみると「墨」の漢字に続いて日本の墨の絵が描かれ、説明文「墨の和漢いろいろあり奈良上品也」の説明が加えられている。そのように「商賣往来」にある語彙すべてに絵と説明が記されている。年代不明の「商賣往来」は本文に仮名が付されている。

〈B〉明治以降の「商賣往来」

本学には明治以降に刊行された「商賣往来」類として1871年（明治4）「世界商賣往来」（番号4）、1872年（明治5）「續世界商賣往来」（番号5）、（明治6年か）「續々世界商賣往来」（番号6）、1872年（明治5）「萬国新商賣往来」（番号8）、1873年（明治6）「萬国商賣往来」（番号7）、1873年（明治6）「開化普通商賣往来」（明治6年）の6点を対象としてとりあげる。

これらはいずれも明治以降とはいうものの1872年から1873年にかけて発刊されている「商賣往来」である。文明開化期の絶頂期の発刊ともいえるもので、1872年（明治5）には「学制」が公布されて全国的に教育への機運が高まった時期でもある。

まず内容構成は江戸時代に流布していた「商賣往来」の編集形式を継承し、語彙や単語内容において欧米の物に変化していることが特徴といえる。石川松太郎によれば、この類は「商売往来系より派生・発展した最後の類、すなわち、第七類は明治初年以降、文明社会の商業生活、わけ

でも商法・商社・貿易などに必要な知識や技術について書き記した往来物である。」とされて、江戸時代の「商売往来」系統より派生・発展した類型と位置付けられている。また「本類には、主として商法や商社に記述を中心としたものと海外貿易用の商品にかかわる語彙に重点をおいたものとの二種がある」とされ、本学往来物は後者の海外貿易用の商品にかかわる語彙を集めた類のものにあたる²²⁾。

この第七類の海外貿易用商品や語彙類を代表するものが橋爪貫一²³⁾の作品とされ、本学にも3冊所蔵されている。橋爪貫一著作の原本は1871年(明治4)9月発刊『世界商賣往来』で東京の青山清吉の梓によるものである。この東京の青山清吉とは小石川大門町の書林であり、それ以外に海軍兵学寮御用出版所でもあった。この橋爪の「世界商賣往来」が明治初年の啓蒙教科書として大変な流布をみたということであるからその系譜本が本学に入手されているわけである。また橋爪貫一による続版「續世界商賣往来」(明治5年)「續々世界商賣往来」(明治6年)や「世界商賣往来補遺 続」(明治6年)、「世界商賣往来追加」(明治6年)などが続々発刊されたところから、そのうちの橋爪本「續商賣往来」と「續々商賣往来」が収集されたのである。

橋爪著「世界商賣往来」の編集方式の特徴は、石川の整理によれば(1)本文中の商品語彙のすぐ下に、その語彙についての漢字・平仮名まじりの注解、図解などが施されていること、(2)巻首に「商賈ノ記号」、アラビア数字・ローマ数字と漢数字の対照表、アルファベットの大文字・小文字・筆記体が記されている。(3)頭書に本文中の主な語彙を英語と片仮名で示しているなどがあるがこの編集が欧化教科書の特徴なのでもあろう。内容については(イ)「当今貿易大に開け英吉利国」より始まる貿易相手国の名前、(ロ)天気を始め風雨などの測量具、(ハ)日本の諸港へ入港する軍艦・商船など船舶の種類、(ニ)煙筒・罐などの船の構造や部品の名称、(ホ)軍艦に備わる鉄砲などの兵器や道具の名前、(ヘ)外国の旅館・商家の職業人の名前、(ト)貿易で取り扱う商品の名前として布の素材と衣服、日用雑具、酒類、肉類とその道具、筆記道具や明かりの類、御者馬車の乗り物道具類、農具や建築道具、彫物道具、穀類、野菜類、果物類、獣類、鳥類、魚貝類、虫類の名称から構成されている。その語彙類の随所に絵入りで説明が付されている。

「續世界商賣往来」では、巻首に日本人と欧米人が貿易港で取引する絵図と「各国ノ貨幣」の比較、頭書に本文語彙の英語と日本語の対比がされている。そして「取り扱う品物の名義に智得せざれば損あって利なし」とのべられ、続いてローマ数字、アラビア数字、書籍の著者の人名や表題などは「弁知緊要なり」とされる。そして各国輸出入の品物の名称が上げられている。それらの語彙は絹・毛織物・薬・日用道具・野菜類・鳥獣の概略などの名称である。

「續々世界商賣往来」では貿易港の荷造り風景の絵に続いて「英国商売用の尺度及び衡量」、頭書は英語単語の和訳が対照されている。商取引用語、交易商品名称、工人の種類、彩色の類、貨物仕立ての国名と交易品名、各国商船の旗章が絵入りで書かれている。

「萬国新商賣往来」及び「萬国商賣往来」も同じ形式で編集されている。まず「萬国新商賣往来」では巻首に地球東半面図と西半面図があり、ついで五大州の広狭人口総数大略がある。本文は「世界之状」から地球の自転や公転、航海入港する大陸名、船、三府七十県八省、兵器、交易場所、貨物の良否、織物、衣服の仕立様、手遊び之品、工匠の用いる道具、馬屋、農具、金玉石

の類、宝石、飲食の品、菓子、茶、葉種、植物・樹脂・草汁の類、草木、商法会社などから構成されている。

「萬国商賣往来」には巻首に目録があり「萬国新商賣往来」との違いは頭所に工夫がこらされている。目次によれば「萬国交易大意、諸国産物、諸国金山、三物字類、諸国旗章大略、税則大意、貨幣大略、年暦時日大略、工作場、薬品大略、外国商旅、外国道程」など、当時世界貿易に乗り出した日本を庶民の視点からみて必要な物の名称が取り上げられている。頭書には「英国龍動橋の図」よりはじまり19項目にわたる本文内容を深める解説が付されている。

「普通商賣往来」は江戸時代の「商賣往来」の編成・語彙類の基本を最も多く踏襲し、「商家日用ノ文字」と共に、その随所に海外の珍器・機械・衣服などの概略を加えて構成したものである。文字も大きく習字の手本としても意識されている。

(C) その他の「商売往来」系統のもの

ここには文化12年「頭書 平仮名 絵入 問屋往来」(番号12)と「萬家日用 商家往来」(番号11)を取り上げる。石川の分類によるとこの2冊とも「商売往来」系より派生・発展したもの」に分類されるとする。派生・発展類型のものはさらに7区分されるが、「問屋往来」はそのうちの第六類に相当する「問屋・本屋・八百屋・小間物屋など商業上の一つの業種を対象として作られたもの」であり、「江戸時代の商業活動における分業が急速にすすんでいく状況に応じて多種・多方面にわたって作られ普及していった」流布本のひとつである²⁰⁾。内容は問屋で働くものの為に作られているが、貨幣両替の問屋、諸国廻船、景気変動の要件、仲買新客の思い入れの見極めと捌き、値段の決め方、運送に気をつける事柄、賃金、懸けの催促や日常生活上の心得などを説いている。全編が記事文体と語彙類文体の二種類あるが本学の本は記事文体のものである。

「萬家日用 商家往来」は「商売往来」系の派生・発展形態の第五類に相当する。この類は「ひろく商人の日常生活や活動に必要な心得・教訓について記した」²⁰⁾内容を特徴とするが、石川によれば農民教訓書にくらべて商人の心得書や教訓書は流布数は少なく、簡潔な内容を特徴とするとされている。その理由は商家や大店では家訓や店則をもって年季奉公人を自前で厳しく躾けていたことに主な要因があるとしている。商家奉公人も夜なべで算盤や読み、書き訓練を受けていたわけで、この類の本はよく読まれたであろう。内容は巻首に船荷の積み降ろし、葉種店の店先、寺子屋の手習いの絵が三枚あり、続いて「夫商賣之業舛雖有種多」で始まり、朝は早起して掃除にはじまる準備、番頭・手代・小僕にいたるまでの篤実律儀の振る舞い様、代銀取引、呉服類、諸国の名産は枚挙に暇あらずとし、続いて衣装装束、産着、裁縫、染物、小紋、縫箔、紙、武具、家財雑具、葉種、魚鳥の名称がのべられ、最後に商家にとって正直は「神明の憐を蒙り家門長久疑い」なきものとして締めくくられている。

(2) 農業型の往来物

ここでは番号13「百姓往来絵抄 全」、番号14「地方往来 全」(明治3年4月)、番号15「改正農業往来」の3冊を取り上げる。

農業型の往来物は石川の分類ではさらに農業往来系と百姓往来系とそれらの双方の派生・発展系の三分類される。本学所蔵農業型往来物はそれぞれの系統に属するものが集められている。

まず農業往来系の「改正農業往来」から検討する。著者は豊後国の江藤弥七・備中国の荻田篠夫で版元は浪華書肆、文口堂である。梓は大坂心齋橋通の三木平七で、扱った書籍商は「皇漢洋書籍處」である東京・西京・江州彦根と大津・播州の明石と姫路・泉州の堺にある八書林である。明治期の本と思われる、巻首に「田地制法乃事」五ヶ条の箇条書きがあり、本文は行書平仮名つきである。石川によれば農業往来系統の基本型は宝暦12年（1762）江藤弥七により選作されたものが天明5年（1785）に大坂の三宅吉兵衛・北尾善七により合梓された「農業往来」が最初で基本であったが、広く長くこの型が流布したことにより明治初年に類書がかなり刊行されたという。本学のは江藤による基本型「農業往来」の明治期発刊の類書であると思われる。内容は「夫農ハ国家の基本食貨の二ツに關係する所に一大事にして」にはじまり、洪水旱魃の難を凌ぐ準備、開墾、家宅や居住地、閑地の植物、畠物、薬種、樹木、種渣苗代にはじまる米こしらへ、農具、全国の五畿八道八十国の名前、八十五州郡村落大区小区、区戸長村吏邑正、三府七十二県、官員、政庁、民工の名称、その外社祠神官、儒者、医者などの職業人の名前、最後に農家に生まれる者は、文学書・数の稽古をはげみ、言行正直にして信誼を違わず「謙退」すれば「おのづから子孫繁盛天賜乃歛娛を窮め自主自由の権ほしいままに執るべきこと疑ひなし」とするなど、明治の新時代への対応と農民にとって有益な多面的な知識を集めたテキストとなっている。

次に「百姓往来絵抄 全」は「百姓往来」系統に属するが、この系統はまず宝暦8年（1758）岩崎矩清の選、江戸の須原屋茂兵衛によって上梓された「田舎往来」が原本であり、この普及のあとに影響をうけて「百姓往来」が明和3年（1766）に、禿筆子作、江戸の鱗形屋孫兵衛の手により公刊されたという²⁹。この「百姓往来」の編集は「商売往来」を手本としながら、内容は「田舎往来」に類似したもので、特徴は「本百姓を中核とする一般農民の子どもを目途におき、かれらの労働や生活に要用語彙を中心に内容を構成」しているものである。そしてその絵入抄本系統本が本学のものであると思われる。岳亭による註づけ、東都書肆の販売と、文江堂の版であるとする。巻首に学ぶ意義が述べられ、本文には「凡百姓取扱文字」に始まり、農業工作の道具、新田開発の地均し、検地による入持主・名主の石盛の確定、水損・旱損の手当など逐一目録見帳をもって分別すべきものとする。肥は干鰯・油絞粕など10種上げられている。米づくりの要点、検見・年貢の念入りな御蔵納め、巡見遵行の節の伝馬や助郷、船や川渡、往還道路の掃除、荷物の貫目、駕籠などの乗り物の基準、公儀への奉敬、家の造作、木綿織の道具、糧は飢饉の節に「不渴様心得第一」とした。茶菓子、客人のもてなし、野業の暇に行うこと、牛馬の飼料、牛馬の馬喰、名所古跡、菱垣廻船について述べ、「みだりに山林の竹木を伐採せず隠田をいたさず正直第一とすれば子孫富貴繁盛家門平生となり神仏の冥慮に叶う」とする内容となっている。

「地方往来」は石川によれば農業往来・百姓往来の派生・発展系統の第八類とされているものであり、1870年（明治3）4月、青松軒蔵版である。明治期になり新時代に対応して地方（ジカタ）に関する新しい内容で編集されたものである。明治7年には橋爪貫一による「地方往来」も出されているが、本学は明治3年の市村蒙補正・筆の系統の「地方往来」である。内容は「夫地方者国之根本也」で始まる。検地、検見、道具、廻船、普請、凶年不作難洗、参勤交代、訴状、身分職分の名称など取りあげている。それらの語彙は簡潔で一般的、日用的なものをくまなく取

り上げ、平仮名が付されている。

(3) 工業型の往来物

ここでは文化13年「柱立往来」（「神社仏閣柱建往来」）と吉田徹三編「諸職必讀百工往来 全」をとりあげる。「柱立往来」は「凡、神社仏閣堂塔伽藍坊舎寺院新規造営仕形、荒増取扱文字」ではじまる。「商売往来」と同様の編集形式により建築造営に関わる用語が漢字で列挙され、平かなが付されている。最後に「柱建其為職分者、平生是越心掛釘鏝等ニ至迄少茂手抜無之様、正直ニ至営作遷宮迂座之式作法、嚴重ニ可相務者也穴賢々」とあり、柱建職人は手を抜かず正直に作法を嚴重に務めるものということで締めくくられている。また書のはじめに聖徳太子像と豊臣秀吉の城普請のときに采配をふるう棟梁の絵2枚があり、それぞれの説明では柱建職人は聖徳太子が百済国から呼びよせて50人の大工が来朝したこと、普請の際に頭分となる才知すぐれるものを区別する目印に半纏を纏ったなどが描かれている。頭書は絵入りで「人倫名目字盡」などがのせられている。

他方、「諸職必讀百工往来 全」は著作権免許が1876年（明治9）8月14日とある。明治期の往来物に共通の字体は細く活字の切れがよい。「凡、土木營繕建築諸向に使用する文字の大概概略」という始まりであり、あらゆる用語が漢字と平かなが付され列挙されている。最後には「総而、仕法帳建業録ニ照準し漏れたるも注意して、精々粗忽疎漏なく格好保存持方に心重を勞し勉勵ス、職掌ニ背かされは内外人の愛顧を受け造化の幸福を蒙るべし」と締めくくられ、職分職掌に背く事なく仕法・建築録に基づく勤勉な仕事を奨励している。

(4) 諸職型の往来物

この型に類するものは1点「諸職往来」がある。「夫、士農工商者国家之至宝、日用万物調達之本源也」で始まる。そしてまず武門では、職制の名称や武士にかかわる用語がのべられ、「学事第一、弓馬劍術兵法軍学書筆算勘無怠慢相勵、則以其功加増、立身父祖裔孫之面目何事乎過之哉」としめくくられ、武士は学問や劍術、兵法や軍学に通じ、書筆算術ができて努力して初めて立身と加増がかなうのであり、祖先への面目も立つというものとする。農夫は「春耕種蒔苗代鳥追」など農耕・農具などに関わる用語が述べられる。そして「農業は生民之大本也」と締めくくられる。次に工匠の輩として大工道具にはじまる用語や名称が最も多く列挙されている。そして「凡、諸職之人受領之官名申賜顯名誉事、其身之手柄且暮無油断可勵勉者也」と締めくくられる。職人はすべて其の身の手柄、油断無き勉勵を奨励する。最後は商人で「扱、商人者、以帳算盤為左右之臣、毎日考相場賣買駆引」など行うとする。商売用語は列挙されるが多くはなく最後に「自他相对和順之賣買、則永災難不來繁荣傳子孫事可道照正直之誠、陰德陽報顯證無疑者也」と和順をもった売買こそ子孫繁荣の道と締めくくられる。また頭書には「武門肝要之図」「正徳御制札御式目」「武家用字」「農業用字」「農人業之図」「工職用字」「工職風俗之図」「商家用字」「商人渡世之図」があり、本文の理解を深めるように工夫されている。

小 括

以上、実業類に分類される本学所蔵往来物18点について検討してきた。近世社会に流布した往

来物の種類は7000種類、発刊部数はかなり膨大な量とされているが、とりわけ幕末の刊行が多量であった。そのなかで、最も膨大な流布をみるのは実業類とくに「商売往来」系統とされている。その理由は「商賣往来」内容が、商人や商家の年季奉公人の学習テキストのみならず、農村における寺子屋などで学習教科書として、近世社会のあらゆる階層の子ども達に広く使用されたことにあるといえる。本学所蔵の「商売往来」系統を検討したなかでも、当時の往来物がおとなと子どもを対象として考えられ、楽しんで読むことができ、分かりやすく簡潔な内容を持ち、実生活や実業に役立つ道具の名前や用語や知識を伝えてくれたところにあった。また、学習テキストとして文字の練習にもなり、その意義の理解もある程度獲得できるという実に多面的に便利な書物として編集されていたことにあったといえる。

(注)

- 1) 国書刊行会編『続々群書類従』は江戸時代の典籍類を神祇・史傳・系譜・法制・記録・地理・教育・宗教・詩文・歌文・産業・雑の12新部門を設け、旧部門が25であったのを改補したものである。その教育部門が国書刊行会編『続々群書類従 第十 教育部』である。復刻発刊が1969年(昭和44年)11月29日になされた。
- 2) 奈良教育大学附属図書館所蔵『日本教育文庫』全11巻。11巻の内容は宗教篇・家訓篇・訓誡篇上・訓誡篇下・考義篇上・考義篇下・心学篇・女訓篇・学校篇・衛生及遊戯篇・教科書篇である。
- 3) 理学博士 岡村金太郎編纂『往来物分類目録』1922年11月15日発行、1925年4月20日、補遺追加再版、発行所/財団法人 啓明会事務所、東大史料編纂所蔵
- 4) 岡村金太郎『往来物に依って見たる徳川時代の庶民教育』1922年4月 東大史料編纂所蔵
- 5) 山本修之助編集者兼発行者『荏川文庫所蔵往来物分類目録』1953年2月20日発行(新潟県佐渡郡真野町新町)、荏川文庫/新潟県佐渡郡真野町新町354 目録の「はしがき」には「昭和27年11月10日」付けの山本修之助による目録作成までの経過が記されている。岡村と石川をつなぐ山本父子がいる。
- 6) 『往来物落穂集』について、石川松太郎は『往来物分類目録並解題 第一集—古往来 [一]』19-21頁において石川謙が「すでに往来をまとめて公刊した埜保己一編の『群書類従』『続群書類従』、または黒川真道編の『日本教育文庫 教科書編』などを意識してのことだったかもしれない」と述べている。これには97種の往来物が収録されている。
- 7) 石川謙『日本近世教育史(教育倫理講座)』1938年6月30日発行、田村初編輯兼発行者/発行所; 日本学術書院/売捌元; 富勘書院
- 8) 石川謙『古往来についての研究—上世・中世についての初等教科書の発達—』1949年8月30日発刊、大日本雄弁会講談社
- 9) 東京教育大学教育学会編集発行、石川謙『庭訓往来についての研究—教科書の取扱方から見た学習方法の発達—』1950年5月4日発刊、売捌所/金子書房、なおこの書は日本学士院賞受賞論文である。

- 10) 謙堂文庫 石川松太郎編集『往来物分類目録並解題 第一集 -古往来 [一]-』(1986年10月1日発刊) 及び『往来物分類目録並解題 第二集 -古往来 [二]-』(1992年12月10日発刊)、東京法令出版印刷、謙堂文庫/東京都豊島区西池袋2-21-15
- 11) 石川松太郎『往来物の成立と展開』1988年7月25日発刊、雄松堂出版
- 12) 石川松太郎編『往来物の成立と展開』所収付録(三) 1-79頁参照 1988年7月25日発刊
- 13) 前掲 石川松太郎『往来物の成立と展開』所収、付録(一) 1-12頁、付録(二) 1-22頁参照
- 14) 宮内庁書陵部・東京大学国語研究室蔵・佐藤武義解説『雲州往来二種』1981年(昭和56年)3月10日発刊。発行者/池嶋洋次、発行所/勉誠社
- 15) 三好信浩『商売往来の世界-日本型「商人」の原像をさぐる-』NHK ブックス537 1987年(昭和62年)10月20日発刊
- 16) 三保サト子編・島根県立島根女子短期大学文学科三保研究室発行『三次私立図書館蔵往来物総目録』1992年3月31日発刊(東大史料編纂所蔵) 「平井文庫」には往来物612点のうち江戸時代の刊本が多く所蔵されている。
- 17) 石川松太郎『往来物の成立と展開』前掲書目次より
- 18) 高橋幹夫『江戸商賣絵字引-絵で見る江戸の商い』1995年4月20日(芙蓉書房) 214頁
- 19) 前掲書、高橋幹夫『江戸商賣絵字引-絵でみる江戸の商い』216頁
- 20) 国書刊行会編『続々群書類従 第十 教育部』1969年(昭和44)11月29日、「例言」のなかの「商賣往来一卷」より 8頁
- 21) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』158頁
- 22) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』171頁
- 23) 石川松太郎前掲書 162頁
- 24) 石川松太郎前掲書 167頁-168頁
- 25) 石川松太郎前掲書 167頁

表1 本学所蔵往来物類の概要

番号	書名	作者	出版年	寸法 (センチ)	1面行数・1行字数 かな付など	題箋	丁数	出版元	発行書林	備考
1	商賈往来			たて21.5, よこ15.5	1面4行・1行10字 かな付	無	14丁			
2	商賈往来輪字引	又玄齋南可職		たて17.0, よこ11.5	1面4行・1行10字 かな付	有	31丁			絵入り、彩色
3	萬家重訓 商賈 往来講釈 全		嘉永新版	たて21.0, よこ15.0	1面4行・1行8字 かな・講釈付	有	23丁	拱都書房 靖共閣		富士屋東道子校正
4	世界商賈往来 全	橋爪貫一	明治4年	たて17.7, よこ12.0	1面4行・1行8字 片仮名付	有	26丁		大坂・東京書林 13書林	頭書あり 表題絵入り 面・加藤雪洲
5	續 世界商賈 往来 全		明治5年	たて17.7, よこ12.0	1面4行・1行8字 片仮名付	有	24丁	東京書肆 小石川大門町 雁金屋清吉 (青山清吉)	京都・大坂・ 東京26書林	海軍兵学寮 御用出版所
6	續々世界商賈往来			たて17.7, よこ11.8	1面4行・1行8字 片仮名付	無	16丁	東京書肆 青山堂	大坂・東京 12書林	一部破損
7	萬国商賈往来 全	黒田行玄閣 横田重登編 柴川半小圃	明治6年 官許	たて22.5, よこ15.5	1面4行・1行7字 平仮名付	有	55丁		東京・大坂・ 京都 9書林	頒書、絵入り
8	萬国新商賈往来	浪華 翠栄堂半山 編	明治5年 官許	たて21.7, よこ15.2	1面4行・1行10字 平仮名・片仮名付	無	37丁	大坂 心斎橋通本町北 赤志忠七	大坂 6書林	
9	開化 普通商賈往来 全	飛州高山 住正太郎	明治6年 5月官許 同年6月 発兌	たて21.7, よこ15.0	1面3行・1行6字 平仮名付	有	78丁	書林欽英堂 大坂南大組第六区 順慶町通四丁目 此村庄輔版	東京・大坂 21書林	
10	現金 商賈往来 完		文化5年 8月再版	たて25.0, よこ16.5	1面5行・1行7字 かななし	有	14丁	日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛版	武江書林	頒書・絵入り
11	萬家日用 商家往来 全	龍草堂(峰) 清裏瑞齋(述)		たて22.3, よこ15.5	1面4行・1行8字 かな付	有	33丁	大阪書肆 心斎橋通南街南入 古鏡屋 伏見屋嘉兵衛		
12	頭書平仮名絵入 問屋往来	積玉圃	文化12年 12月	たて22.2, よこ15.2	1面5行・1行7字 かな付	無	12丁	心斎橋通北 久太良町 河内屋喜兵衛	浪華書林	
13	百姓往来 絵抄 全			たて17.5, よこ11.3	1面4行・1行7字 かな付・絵入	有	21丁	東都書林 馬喰町四丁目 文江堂吉田屋文三郎		
14	地方往来		明治3年 官許	たて18.5, よこ12.5	1面4行・1行9字 かな付	無	20丁 +4丁	東京書賈 青松軒	東京書林 17軒	
15	改正農業往来 全	江藤弥七 萩田篠夫		たて22.0, よこ15.2	1面4行・1行7字 かな付	有	27丁	浪華書肆 文口堂	皇漢洋書精處 9書林	
16	柱立往来 全 頭書人倫名目字盡 森治版		文化13年	たて17.7, よこ12.0	1面5行・1行8字 かな付	有	14丁	江戸馬喰町二丁目 森屋治兵衛	東都 書物問屋	撰者 江戸東里山人
17	踏鞴必讀 百工往来 全	吉田徹三編	明治9年 8月14日 版權免許	たて18.5, よこ12.5	1面5行・1行7字 かな付	有	40丁	小田右衛門 第五大区八小区 浅草暗院借地		吉田徹三宿所 第二大区六小区麻布 市兵衛町十番地
18	踏鞴往来			たて25.0, よこ17.5	1面5行・1行6字 かな付	無	21丁	京寺町松原上ル 菊屋七郎兵衛		頒書絵入